
金くれ老婆との遭遇

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金くれ老婆との遭遇

【Nコード】

N5714U

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

実話。

散歩してたら、やっかいな老婆に話しかけられ、巻き込まれた。

「1000円貸してくんない」

歩いていると、いきなり声をかけられた。

声のほうを見ると、顔中あばただらけの老婆が座っていた。

「お金は無いです」

私は本当に一銭も持っていなかった。

「そんな・・・」

「とりあえず図書館に行きましょう。ここじゃ蒸し暑いですからその日はかんかん照りで、蒸し暑かった。」

「図書館なら貸してもらえるかな」

老婆は横に並んでついて来た。

元々図書館へ行くつもりだったので、連れ立って歩いた。

「貸してくんないと帰れない」

と、老婆は言う。

「電車でないと帰れないんですか」

と問うと、

「お腹が減ったから、食べ物を買いたい」

と言った。

私は心の中で

「食べ物に1000円もかからないだろう。これは怪しい」と思った。

「500円でいいから貸してくんない」

「お金ないので」

「1000円でいいからさ」

「私、本当に持ってないんです」

私は、ノートと水筒のみが入った鞆の中を見せ、飛び跳ねてみせた。「疲れたから、あたしここで待ってるわ。1000円借りてきて」

なんとという他力本願。ちよつと腹が立った。

「ご自分で借りに行けばいいじゃないですか」
私はそう言い捨てて、図書館へ向かう。

図書館で、お金は借りなかった。

自分の用事を済ませる間、作戦を練った。

図書館へついてこなかったのは、やはり怪しい。
通報されると思ったのだろうか。

食べ物なら、老婆のいた近くのお店で試食が出ていた。

それを食べるよう、老婆に提案しよう。

怪しいとはいえ、暑い中外で待つ老婆が心配だったので、五分で済ませて図書館を出た。

しかし老婆はいなくなっていた。

「新手の詐欺か。それとも誰かに恵んでもらったのか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714u/>

金くれ老婆との遭遇

2011年10月6日01時06分発行